受賞報告

# 山岸俊男先生
# 日本心理学会国際賞特別賞受賞によせて

**平成 25 年度 第 8 回日本心理学会国際賞特別賞　受賞者：山岸 俊男**
受賞理由：北海道大学および玉川大学脳科学研究所で行われた
人間の社会行動（利他性・公平感・信頼）に関する実験研究に対して

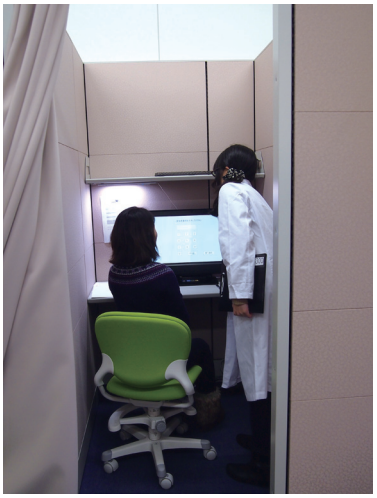
受賞記念講演の様子

日本心理学会国際賞特別賞は国内の心理学界において、最も栄誉ある賞である。歴代の受賞者を見ても、我が国を代表する心理学者が並んでおり、山岸俊男教授がこれまで行ってきた研究は、日本にとどまらず世界の心理学界に与えたインパクトが如何に大きいかがわかる。山岸俊男教授はこれまで、信頼の日米比較に関する研究、社会的ジレンマ問題の解決に関する研究、そして、近年では、人間の行動や心理は、社会的環境に適応するかたちで備わっているという進化論・適応論的アプローチをとることによって、人間の利他性、公平感などの研究を行ってきた。それら一連の業績は、経済学、人類学といった心理学以外の社会科学分野のみならず、生物学、神経科学といった自然科学分野においても大きな影響を与えている。

また、日本人が強く持つ「悪評を回避したいという戦略」が日常の何気ない行動（残り一つの物を取るかどうか）に影響を与えていることを示した研究は、心理学において有力誌の一つである Psychological Science 誌へ掲載され、同時に、2008 年に Science 誌の Editor's Choice として紹介された。また、数百人の学生サンプル、及び一般人サンプルを対象にした行動実験を行うことによって、他者から馬鹿にされた際にやり返す人は、公正さ（fairness）を追求しているわけでなく（Yamagishi et al, PNAS, 2009）、むしろ非協力的な傾向を持っていることを示した（Yamagishi et al, PNAS, 2012）。これら PNAS 誌へ掲載された 2 つの論文は、近年において、人間の利他性の進化的起源を明らかにする研究分野で大きなインパクトを持つモデル（強い互恵性モデル）を真っ向から否定する内容であり、このモデルの妥当性に一石を投じるものであった。山岸教授は現在、玉川大学脳科学研究所において約 500 名の一般人サンプルを対象にした実験を行うことで、人間の利他性に関する理論の検証、そして新たな理論の構築を進めている。また参加者の脳画像を撮像することで、社会行動と関連する脳部位の特定も進めている。研究プロジェクトの規模の大きさを考えると、これまで以上にインパクトを持つ研究結果が生まれるのは間違いないだろう。

山岸教授の講演を聞くと、その実験が示すデータはとても生々しく血が通っているなと感じることが多い。実際の人間社会がそこに展開されており、リアルさを感じる。そして、そのリアルさは聴衆に対して大きな説得力を生む。山岸教授は、切れ味抜群の日本刀のような鋭さを感じさせ、傍で見て時として畏れを感じると同時に、超えなくてはいけない山の大きさを日々感じている。

（脳科学研究所　高岸治人）



社会心理学実験室での
実験の様子
（上・下とも／玉川大学）